「第３回　おいしいね　たのしいね！」地域貢献事業開催報告

塩田博子・高杉志緒・芳賀絵美子・稲員祥子

Report on the third “*It’s a delicious and Fun!*” Extention Lecture Jointly Organized by the Departments of Nutritional Science and Early Childhood Education and Care

by
Hiroko Shiota, Shio Takasugi, Emiko Haga and Syouko Inakazu

要旨

本稿は、平成25（2013）年度に初回開催して以降、年１回の頻度で開催している本学主催の地域貢献事業「第３回　おいしいね　たのしいね！」に関する社会活動報告である。栄養健康学科教員・ボランティア学生を主体とした「親子クッキング」、保育学科教員・ボランティア学生を主体とした「手作りおもちゃ制作」を行う両学科による親子体験活動は、過去２回とも参加家族から好評であったため、平成27年度も同じ趣旨にて講座を開催した。過去２回と大きく異なる点は「子どもゆめ基金」（独立行政法人　国立青少年教育振興機構）の助成を受けた地域貢献事業として開催したこと、本学の耐震補強工事に伴う使用教室の変更、以上２点である。その他、過去の反省及び外部資金助成に基づき①託児の外注、②開催回数（日数）の調整（平成25年度は１日、26年度は３日、27年度は２日）、③午後「伝承あそび」をテーマとした親子レクリエーションの展開、④「大型絵本読みきかせ」活動の導入、以上である。過去の開催と同様、主な開催目的である「地域住民に対し家庭における「食育」の重要性を伝える」「親子がふれ合う時間と遊び（第１回・第２回：手作りおもちゃ、第３回：伝承遊び）の良さを味わう機会を提供する」双方を概ね達成することができ、参加学生も「食育」「保育」及び「家族の交流（ふれ合い）」の重要性を学ぶ機会を得ることができた。今後も双方の学科の特性を生かした合同の活動を継続し、「食育」「保育」及び「家族の交流」の重要性を伝え、ふれあいの場を提供することを通じて地域貢献を実現していきたい。

キーワード：食育基本法、子育て支援、クッキング保育、伝承遊び、わらべ歌、
絵本読み聞かせ、家族交流

１　はじめに　―本事業報告の趣旨―（事業開催起案者：塩田博子）

内閣府による食育基本計画では、平成23年度から平成27年度を第２次食育推進基本計画として「周知」から「実践」に展開した食育推進活動を行っている。同時に下関でも「第二次下関ぶちうま食育プラン」として各ライフステージにおいて、多様な活動が行われている(1)。

このような社会的動向に基づき、本学では２学科（栄養健康学科・保育学科）の専門性を生かした地域貢献事業「おいしいね　たのしいね！」を平成25年度より開催している。

最初に過去２回の概要を振り返りたい。開催時期は毎年６月が「食育月間」となっているため６月の開催を主軸として学内行事、教員の予定を勘案して実施している。開催日数は、平成25年度第１回は１日、平成26年度第２回は定員数を多く超える申し込みがあったため６月に２日、７月に１日の計３日（同内容で対象者が異なる３回）実施した。満足度についていえば、平成25、26年度共に参加者アンケート結果は「今日１日を楽しくすごせたか」に対して「はい」という回答が100％であった。開催スタッフの反省会において、参加者の満足度や概ね当初の目的は達成できたことに基づき食育・保育・家庭交流の推進を図るため、平成27年度も継続的な講座の開催が必要であると分析した。

このように過去２回の経過を検討して平成27年度、第３回「おいしいね　たのしいね！」を行うこととなった。しかし開催にあたり、解決に困難を要する運営費・運営形態の問題があった。それは、①参加者から徴収する参加費の軽減分を本学が負担しているための学校会計負担の増加、②（参加対象者が３歳～就学前の家庭であるため）３歳未満児の弟妹がいる参加家庭に対する安全な託児サービスの続行、以上の問題点である。特に後者については、過去２回、保育士免許を持った教員・卒業生スタッフも入っていたが、保育学科学生が中心となっていたため安全性に問題を抱えていた。以上、２点の問題点を解決すべく開催担当教員内で検討したところ、外部資金の導入案が挙がった。外部資金の応募先としては、独立行政法人国立青少年教育振興機構「子どもゆめ基金」（平成13年創設）を対象とした。その理由は①「子どもゆめ基金」の助成目的が「国と民間が協力して子どもの体験・読書活動などを応援し、子どもの健全育成の手助けをする基金」であること、②助成対象活動として「子どもの体験活動の振興を図る活動への助成」「子どもの読書活動の振興を図る活動への助成」「子ども向けソフト教材を開発・普及する活動への助成」を柱としていること、③助成対象団体が「青少年教育に関する団体（公益財団法人、公益社団法人、一般財団法人、一般社団法人、特定非営利活動法人、法人格を有しないが青少年のために活動する団体）」であり、過去２回の活動と照らし合わせた場合、①目的、②対象活動、③助成対象、３つに合致するため応募可能と考えたためである(2)。

従って、平成27年度第３回（今回）の開催目的は、①「地域住民に対し、家庭における「食育」の重要性を伝える」、②「子ども達に「遊び」を通じて食の楽しさ・大切さを伝える」、③「親子がふれ合う時間と伝承遊びの良さを味わう機会を提供する」、以上３点として平成26年11月に「子どもゆめ基金」に助成を応募した。その結果、平成27年４月末に採択通知を受け、支援事業としての実施となった。過去２回の改善と外部資金受託に基づいた大きな変更点は、①開催形態の変更（本学の「公開講座」ではなく「地域貢献事業」として開催）、②託児の外注、③開催回数（日数）の設定、④午後「伝承遊び」をテーマとした親子リクレーションの展開、⑤「大型絵本の読み聞かせ」活動の導入、以上５点である。以上をふまえて以下、地域貢献事業の報告を行う。

２　実施方法

以下、今回の実施方法について広報・募集方法（２・１）、実施概要（２・２）の順で記す。

２・１　広報・募集方法について（担当教員：芳賀絵美子）

昨年度同様、４月から広報活動を始めた。無料広告は「週刊リフレッシュ」（５月29日発行）に掲載され、前回と同様に旧市内の幼稚園22園、認定こども園８園、保育所40園、児童館４館、その他２施設への郵送および訪問配布も引き続き行い、ショッピングセンターや市の施設にもチラシ（**図１**）を配置していただいた（**表１**）。

また、今年度は地方ラジオ局（カモンＦＭ）の番組に教員１名と保育学科学生１名が出演させていただき（６月５日）、本学の他の公開講座とともに応募の呼びかけを行った。当日の報道については、NHK山口放送局が取材に訪れ、同日「昼のニュース」で約３分間紹介された。

図１　配布チラシ

表１　下関旧市内施設へのチラシ・ポスターの配布先

	郵送	訪問配布	合計（件）
幼稚園	20	2	22
認定こども園	8	0	8
保育所	38	2	40
児童館	4	0	4
その他	1	1	2
合　計（件）	71	5	76

２・２　実施概要について（担当教員：芳賀絵美子）

参加対象は３歳～小学校就学前の子どもとその保護者とし、各日定員は子ども24名、保護者24名とした。応募方法は前回同様、往復はがきに必要事項を記入して郵送とし締め切りは６月５日消印有効とした。

最初に会計面について述べる。１章で先述したように、今年度は「子どもゆめ基金」の助成金を受けたため、託児の外注とボランティア学生および卒業生への謝金の支払いが実現した。しかし、食材および保険料は助成対象外となるため、その部分を学校会計予算および参加費収入で賄う必要が出た。参加費については昨年度１人50円を今年度子ども100円、保護者200円、託児200円へと値上げを行った。これは、昨年度のアンケートから「500円までなら参加をしたい」という回答が合計90％と高かったことによる(3)。このように外部資金の受託と参加費若干の値上げにより、本学が負担した金額は前年度より軽減された。

次に参加者について述べる。応募者は、49家族（うち期日外２家族）であり、抽選の結果44家族112名の参加となった。抽選ではずれた応募者・締め切りを過ぎた応募者については、お断りのはがきを郵送した。また当日参加者は６月27日が21家族55名、６月28日が23家族57名となった。

最後に過去２回と大きく異なる概要を２点述べる。１点目は、未満児の託児を外注したことである。これは、前述の通り外部資金獲得により可能となった（３・２）。２点目は、使用教室の変更である。過去２回、「親子クッキング」と「託児」及び「手作りおもちゃ制作」は別棟で行っていたため参加者の移動に時間がかかり、雨天時には傘をささねばならなかった。し

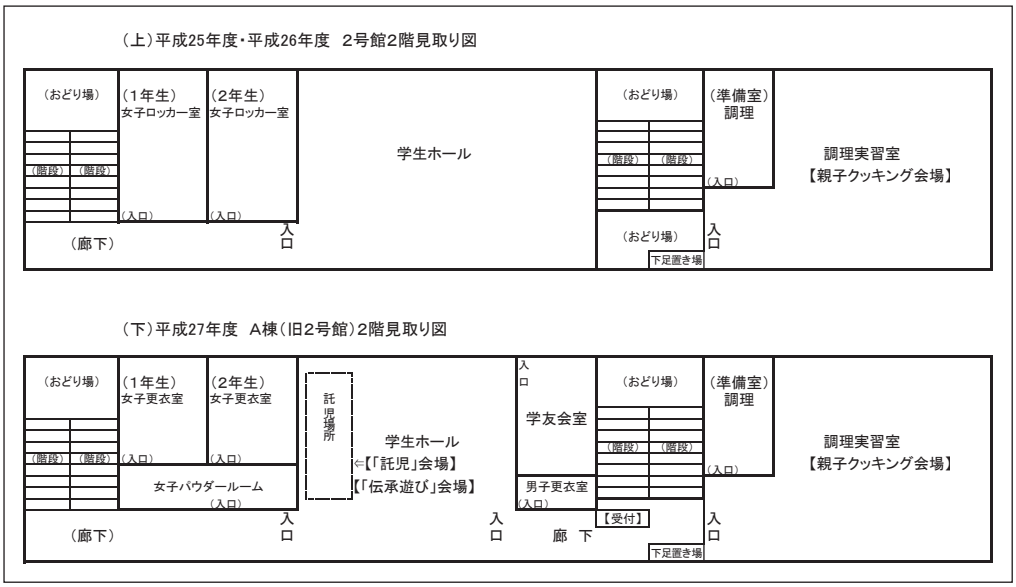

図２（上）平成25年度・26年度　２号館２階・（下）平成27年度　Ａ棟（旧２号館）２階

かし、今年度は「調理実習室」の隣にある「学生ホール」を使用して「託児」と「伝承遊び」を行うことができた。それは、平成26年度に行われた学内耐震補強工事に伴い、以前は壁で仕切られていたので同じ２階にありながら階段を使わねば移動できなかった「学生ホール」と「調理実習室」が、「学生ホール」の改装（学友会室・男子更衣室の新設）と廊下の新設により、往来が容易にできるようになったことに起因している（**図２**）。

３　実施内容報告

３・１　受付（担当教員：高杉志緒）

過去２回は「調理実習室」とは別棟の「託児」「おもちゃ制作」を行う教室の玄関で行ったが、今回は、託児を行う「学生ホール」と「調理実習室」をつなぐＡ棟２階踊り場で受付を行った。従って、１階の中央入口にボランティア学生を１名待機させ、参加者に①受付を２階で行うこと、②トイレは２階にないことを予め伝えてもらった。また、前回は「託児希望有り」の家族と一般受付（託児希望無し）の家族の受付場所を別々にしたが、今回は場所が狭いこともあり、１箇所で受付を行った（**写真１**）。

双方の教室が隣接しているので、託児対象児がない場合は、受付後すぐに下足箱前で上履きに履き替えて、調理実習室に移動することができた。また、託児希望家族の場合は、受付で名前確認・保険料徴収後、すぐに隣接の「学生ホール」に設けた託児場所に移動して頂き、別途、委託業者が託児対象児に関する受付を行った（**写真２、３・２**）。

写真１　受付テーブルと担当学生（２名）

写真２　託児用受付テーブルと託児状況

３・２　託児（担当教員：塩田博子）

託児は参加対象者が３歳～就学前の家庭であるため、３歳未満の弟妹がいる家族を対象として過去２回行ってきた。今回の開催目的である「家庭における『食育』の重要性を伝え、子ども達に『遊び』を通じて食の楽しさ・大切さを伝える」「親子がふれ合う時間と伝承遊びの良さを味わう機会を提供する」を参加者に達成して頂くためにも託児は必要と考え、外部資金の

導入に伴い安全性を考えて今回は専門の託児業者に外注した。「子どもゆめ基金」に対する申請予算・助成金との兼ね合いもあったため、託児時間は午前中の調理実習時間のみとし（10時～12時)、昼食（会食）と午後の活動「伝承あそび」は家族と一緒に過ごして頂いた。

このように前２回と大きく違う点は、専門の託児業者に依頼したことと託児会場を変更したことである。託児会場は、午前中の調理実習会場である「調理実習室」前の階段フロアーを挟んで隣接した「学生ホール」とした（**２・２、図２**)。この会場は午後の伝承遊びに使用する会場であるため、前回までの棟を違えての託児と異なり、参加者の移動の負担が軽減された。また、主催者側からみても①（前回まで学生スタッフを中心に行っていた）託児および受付での託児対象児についての聞き取り双方を託児業者で行うためスタッフ業務が軽減された、②会場の水回りの設備が整っている、③午前・午後の活動会場と託児場所が近いため連絡が行いやすいなど、スタッフ業務の簡素化・環境改善につながり、担当部署は個別活動に集中しやすくなった。

３・３　調理　―親子クッキング―

３・３・１　献立作成（担当教員：塩田博子、芳賀絵美子）

前回のアンケートで作ってみたいと意見の多かった「ピザ」を今回のメイン献立とし、前回までの目的・留意点を念頭に献立作成に取り組んだ。その結果、メニューは「かんたん !! ポテトごはんピザ」「マカロニサラダ～カレーふうみ～」「かきたま汁」「フルーツヨーグルト」の４つとなった（**表２、写真３**)。なお、今回は、アレルギー等で個別対応が必要な参加者はいなかった。

表２　子ども１人分の栄養価

料理名	エネルギー (kcal)	タンパク質 (g)	塩分 (g)
ポテトごはんピザ	262	8.6	1.1
マカロニサラダ	113	4.7	0.3
かきたま汁	25	2.3	0.9
フルーツヨーグルト	84	2.2	0.1
合計	484	17.8	2.4

写真３　当日の盛り付け例
（プレート奥）「かんたん !! ポテトごはんピザ」
（プレート手前左）「フルーツヨーグルト」
（プレート手前右）「マカロニサラダ～カレーふうみ～」

３・３・２　調理の実施と配布資料説明（指導者：塩田博子、芳賀絵美子）

ひと班２～３家族とし、各日８班を編成した。受付終了後、調理実習室への入室時に各家族

に資料を配布した。配布資料はレシピ冊子「きょうのメニュー」・「おりょうりまるわかりえほん」・「たべものきかんしゃにこにこ号」、プリント「幼児期の食生活と食育」、「わたしのおすすめ絵本」（学友会公認部活動ほんの倶楽部・教職員有志作成）、以上５点である。配布資料については会食中に説明を行った。

調理に関する配布資料は毎年使用できる調理の基本の媒体作成を目的とし、レシピ冊子「きょうのメニュー」とは別に「おりょうりまるわかりえほん」を作成した。前回同様、子どもが絵本のように親しみをもって見られるようにＡ５サイズの小型にし、写真や絵を多数挿入して字の読めない子どもでもわかりやすいように作成した（**写真４－１**）。身支度の方法・手洗いの方法・調理器具について写真入りでくわしく掲載した表現方法は前年度と同じだが、昨年度、軽いやけどなど若干名の負傷者が出たことを受けて、包丁やガスの取り扱いなど危機管理に重点をおいて作成した。また、前回は冊子にとじ込んで配布した「たべものきかんしゃにこにこ号」[(4)] をラミネート加工し、自宅でくりかえし使えるように工夫した。使い方の説明は「おりょうりまるわかりえほん」巻末に保護者向けの記事とともに掲載した。

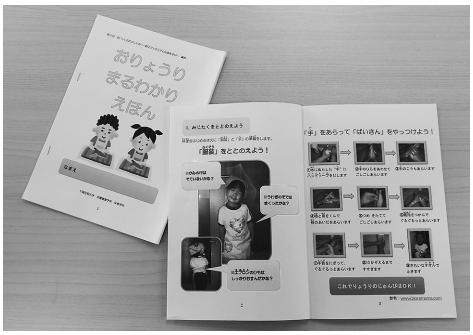

写真４－１　冊子「おりょうりまるわかりえほん」

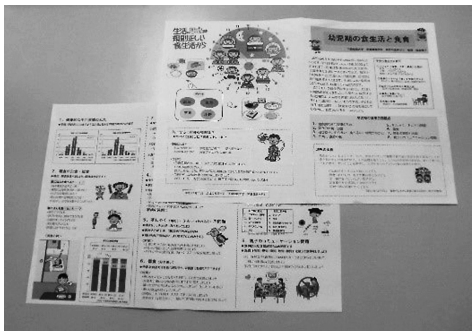

写真４－２　パンフレット「幼児の食生活と食育」

今回は調理にあたって、30分程度の全体レクチャーを行った後、各班にボランティア学生を配置し、調理の進行を補助した。このボランティア学生には前年同様事前調理実習を実施し、献立をしっかり把握した状態で本番に臨むことができた。また、大まかな流れを教員がマイクで指示を出すことによってスムーズに進行した。しかし、作業量が多いことや年少児には困難な作業があるなど対象者の把握が不十分な部分があり、途中で調理作業にあきてしまう子どもの姿もみられた。

また、開催初日は、レクチャー時にひと班で何人分作成するのか、どの食器に何を盛り付けるかなどの説明が抜けていたため混乱を招いてしまった。そこで、２日目は使用する食器についても予め伝えるように配慮した。両日ともレクチャー及び媒体で危機管理を十分に伝えたためか、今回は負傷者もなく調理を終えることができた。

他方、調理実習室階下の給食実務実習室にて、教員とボランティア学生が前年同様にスタッ

フ食の準備・食器洗浄などを行った。

昼食後の講話には、今回指導教員（塩田）が作成したパンフレット「幼児期の食生活と食育」（**写真４－２**）を使用した。書中には最近の幼児期の食生活の問題点と家庭の中でできる改善策を挙げている。また、筆者の「幼児の食育ゼミ」で行った調査の一つ、「幼児の好きなお菓子や飲み物」なども挙げ、間食についての適切な内容や量、時間などもデータとして挙げている。これを、保護者が食事を終えた時間を見計らって簡単ではあるが説明を行い、持ち帰って家族で見ていただくようお願いをした。

また、託児や午後「伝承遊び」の会場（学生ホール）の一隅には、幼児の好きなお菓子やジュースに含まれる糖分（砂糖に換算した量）、油脂量や食塩相当量、自宅で簡単に作れるラーメンやスープ類、中食として食べられるお弁当やパンなどの食塩相当量や油脂量などを実際の砂糖や食塩、油に見立てた絵の具の溶液を食品サンプルと一緒に並べ、実際の量を目で見て、把握してもらえるように展示を行った（**写真５**）。

しかし、ゆっくりと見ていただく時間を設けることが困難であった。数組ではあるが、目に留めた家族は、多くの砂糖、食塩や油脂の量に驚きを見せていた。このように今回は媒体の展示にとどまり、十分な説明を行うことができなかったため、次回の検討課題としたい。

写真５ 清涼飲料水中の糖分を砂糖に換算したもの

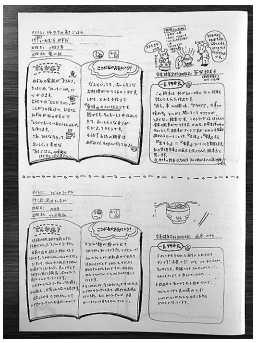

写真６ パンフレット「 ―わたしのおすすめ絵本―」（表紙・末頁）

なお、受付時に渡した配布物の１つであるパンフレット「わたしのおすすめ絵本」は家庭での読書推進、即ち「食」に関する絵本に親しんで頂くために作成・配布した（**写真６**）。掲載内容は、本講座で読み聞かせを行う「はらぺこあおむし」を含めた「食」をテーマとした絵本６冊の紹介である（若山憲 著「しろくまちゃんのほっとけーき」1972年、岩田明子 文・絵「ばけばけばけばけ　ばけたくん」2009年、中川ひろたか 文；村上康成 絵「おおきくなるっていうことは」1999年、岩村和朗 作「14ひきのあさごはん」1983年、岡田よしたか 作「うどんのうーやん」2012年）。学生・教職員有志６名が各１冊ずつ選び、作者・書名・出版年といった書誌情報をはじめ「どんな本か」（概要）、「（推薦者の）お気に入り」など、参加保護者

に向けて分かりやすく紹介した。

３・４　大型絵本読み聞かせ「はらぺこあおむし」（指導者：高杉志緒）

保育学科「食育表現ゼミナール」所属学生３名（１年２名・２年１名、以下「食育表現ゼミ」と略記）も「親子クッキング」に参加した。当日の主な活動は、１）親子クッキングの班別活動の補助、２）大型絵本読み聞かせ、以上の２つである。

前者の調理については、５月27日（水）放課後、栄養健康学科の参加予定学生と共に当日と同じ予定材料・分量で調理実習を行った（１年生２名）。前回は、開催１週間以内（６月24日）に行ったが、今回は約１か月前に行ったことで、余裕をもって当日の行動を考えることができた。参加学生達は、事前実習・試食を通じて切砕方法・調理手順・安全確認（オーブンの鉄板が熱くなるので火傷に注意することなど）を事前に体験できただけでなく、味付けについて（マカロニサラダのカレー粉の増量を希望）、当日の子どもの動きについて（ピザの成型・トッピングは比較的簡単で楽しいので、子ども達を中心に行ってもらう）など、予め気づくことによって早期に改善・行動の計画を立てることができた。

後者の大型絵本読み聞かせは、食育推進・読書推進の目的で行った。前年度、食育表現ゼミ所属学生は、当日の調理実習前に手遊び「なつやさいカレーのうた」を披露して参加者と一緒に行うことによって、調理の「導入活動」を行った。今年度の大型絵本読み聞かせは、①当日の献立や活動に関連した内容を主題とする、②未満児にも理解しやすい、③「親子クッキング」の会食時に楽しめる、以上に配慮して「絵本の読みきかせ」を行うこととした。

選書の留意事項としては、約50名を対象とするため、大型絵本から選ぶ必要があった。「食」を主題とする大型絵本で、未満児にも理解しやすい既刊本の種類は限られている。そこで、栄養健康学科教員と相談の上、「自分の適量に応じてバランス良く食べる必要性」「食べることによって大きくなり、綺麗な蝶（大人）になる」というメッセージが込められている絵本としてエリック・カール作、森比左志訳「はらぺこ　あおむし」（偕成社、1994年）を選書した。

当日の配慮事項は、①会食の最後に行うため子ども達の期待感・集中力を高めること、②全員によく理解できるようにゆっくり・はっきりと読むこと、③子ども達が一緒に参加できる場面を設定すること、④絵本読みの直後に本の内容に基づいて栄養健康学科教員の講話を行うので連携を図ること、以上４点である。１点目については、最初から絵本の表紙を出しておくのではなく絵本台に布を掛け、子ども達の注意が前に立つ学生に向けられるように配慮した。同時に絵本読みの前に学生達が手遊びを子ども達と行うことによって子ども達の集中力を高めた（**写真７**）。

写真７ 「絵本よみきかせ」前の手遊び

写真８ 「はらぺこあおむし」読み聞かせ

２点目については、マイクを使って絵本を読むと同時に、また大型絵本の付属品であった「あおむし」の縫いぐるみを適宜動かして、どの部分を読んでいるのか分かるように工夫した（**写真８**）。３点目については、あおむしが月曜日から土曜日に色々なものを食べる場面で、あおむしの縫いぐるみの動きに合わせて子ども達に「ひとつ」「ふたつ」と一緒に数をかぞえてもらうように促した。４点目については、読み終わった後、裏表紙をみせて「おしまい」と言った後、すぐに教員が講話を始められるようにマイクを渡した。更に、講話の導入で最後の頁の「蝶」が登場するため講話の内容に合わせて該当頁を広げて対応させた。

３・５「伝承遊び」について（指導者：稲員祥子、環境指導者：塩田博子、報告者：高杉志緒）

前年度までは午後から「手作りおもちゃの制作」を行ったが、今年度は「親子がふれ合う時間と伝承遊びの良さを味わう機会を提供する」という目的のもと「伝承遊び」の中でも特に手軽にふれ合い遊びが楽しめる「わらべ歌遊び」を行った。

過去２回は、「手作りおもちゃ」（第１回「割り箸鉄砲」、第２回「トントン相撲」）を制作し、制作したおもちゃで遊ぶ活動を行った。但し、午前中に調理という手先を使う作業を続けるため、①「午後は体全体を動かす活動を行ってみてはどうか」という意見が教員間から出たこと、②「伝承遊び」は道具・遊具を使わずに親子・家族間の交流を深めることができる、③帰宅後も気軽に楽しんで頂くことができる、以上３点を勘案して「伝承遊び」に重点を置いた活動を計画した。

活動場所は、午前中「託児」会場を片付けた「学生ホール」とした。日常は、学生達が団らん・食事を行う共有スペースであるため、木製の円形テーブル・椅子が置いてあるが、安全のために壁際に固めて置き、洗面台の前には衝立を置いて子どもが勝手に使用できないように配慮した。同時に、怪我防止のため履物は脱いで頂いて活動を行った（**写真９**）。その他、会場の工夫としては、午後に行う活動を掲示して可視化して「どのようなプログラムなのか」「何を行うのか」情報を共有できるように工夫した（**写真10**）。

写真９ 会場内「くつおきば」の表示

写真 10　会場内「プログラム」掲示物

指導は「伝承遊びゼミナール」担当の保育学科教員（１名）とゼミナール所属保育学科学生１年生を中心とした学生（７名）が中心となった。午前中、調理の折に動物のマークで分けられた２～３家族を１グループとして１名学生が担当し、「わらべ歌遊び」を中心に以下の活動を行った。

１）導入「伝承遊び」の紹介

玩具を使う「伝承遊び」（けん玉、あやとり、紙風船、だるま落としなど本物の玩具を１人につき１つずつ学生が手にもって見せながら紹介）と「わらべ歌遊び」（道具を使わず歌をうたいながら複数人で関わって遊ぶ本日の主活動）の違いについて教員が説明した（**写真 11**）。

写真 11　玩具を使った「伝承遊び」の説明

写真 12 「お寺のおしょうさん」を行う参加者と見守る学生

２）主活動「わらべ歌遊び」

午前中の調理活動を行った８班の班編成（１班につき２～３家族）に分かれて活動を行った。学生は、各班１名ずつ担当し、全体説明の後、各班での遊びの説明や補助を行った。今回、予定した「わらべ歌遊び」の流れと遊び（①～⑥）は、次の通りである。

① 家族全員で遊ぶ：お寺のおしょうさん
② 親子２人で遊ぶ：一本橋こちょこちょ
③ 家族全員・他の親子と一緒に遊ぶ：なべなべ底ぬけ
④ 他の親子と一緒に遊ぶ：はないちもんめ
⑤ 親子で遊ぶ：だるまさん
⑥ 一人遊び：げんこつやまのたぬきさん

写真 13 「なべなべ底抜け」を行う親子

但し、「④他の親子と一緒に遊ぶ：はないちもんめ」は、所要時間を考慮に入れた結果、当日は行わなかった。前年度までは、手作り玩具を制作した後、親子で遊ぶという流れであったが、今年度は道具を使わず、説明後すぐに親子で遊ぶことができるため、適宜、ボランティア学生が担当班を見守りながら進行を進めた（**写真 12**）。特に「③なべなべ底抜け」では、背の高さが違う親子で行う場合、３人で行う場合のアドバイス、援助が必要であった（**写真 13**）。周知の通り「なべなべ底抜け」は通常２名で行う。その動作は、最初に向かい合って両手を互いにつなぎ、手をつないだまま両手を左右にふる。次に向かい合わせに片方の手を上げて下をくぐり背中合わせになる。今回、背の高さが大きく異なる親子で行った後、家族全員すなわち３人～４人で行ったため、動作の後半における片方の手を上げて下をくぐるタイミング（一斉に全員が行うのではなく一人ずつ順番にくぐる）、繋いだ手の握り方（くぐる時には少し指を離す）といったポイントを担当学生が指示することによって、全員が楽しめるように配慮した。

３）まとめ「家庭における「わらべ歌遊び」の推奨」

上記５つの「わらべ歌遊び」（①～③、⑤、⑥）を行った後、担当教員が参考文献[5]に基づいて作成した「わらべ歌」について解説したパンフレット「「わらべうた」ってなあに？」（写

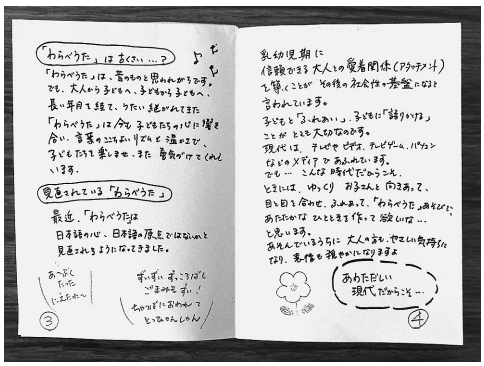

写真 14 「「わらべうた」ってなあに？」3 頁- 4 頁

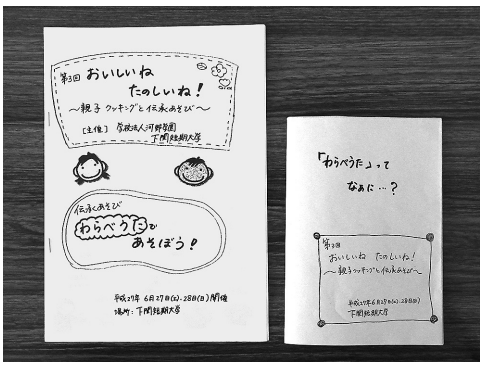

写真 15 「わらべ歌解説パンフレット表紙（２種類）

真 14)、当日行った遊びを含めた７種の「わらべ歌遊び」の手順を言葉と挿絵で記した「伝承あそびわらべうたであそぼう！」(**写真 15　左**）について触れ、自宅でも家族や祖父母と共に楽しんで頂きたい意向を伝えた。

３・６　参加証書「ぬり絵」について（指導担当者：高杉志緒）

午後の遊び終了後、「ぬり絵」を兼ねた「おいしいね！　たのしいね！―がんばったね！―」と記した絵入Ａ４版の参加証書を子ども１人につき２種類ずつ渡した（**写真 16－Ⅰ〔右または左**〕、**写真 16－Ⅱ**）。配布目的は、一日の活動を締めくくるにあたって参加者、特に子ども達に充実感・達成感を味わってもらうためである。昨年度は子ども達が「野菜スタンプ」を押印して仕上げた参加証（１枚）を配布したが、今年度は子ども達が持ち帰って家庭で楽しめる「ぬり絵」にした。平成 25 年度も「ぬり絵」（１種類１枚）を配布したが、今年度の工夫点としては、①午前中につくったピザを主題にして家庭で思い出を共有できるようにしたこと、②午前中に調理した「ピザの具のシール」を作り、切って貼れるようにしたこと、以上が挙げられる。

写真 16－Ⅰ　参加証書ぬり絵（男の子・女の子）

写真 16－Ⅱ　参加証書ぬり絵(動物入)とシール

写真 17　ぬり絵の説明を行うボランティア学生

実際の配布時には、「ぬり絵」の図案を描いたボランティア学生が制作意図を説明し（**写真 17**)、子ども達一人ひとりの名前を呼んで手渡した。

４　アンケート実施・集計・報告（担当教員：塩田博子）

アンケート用紙は、当日学生ホール内ですべての活動終了後に配布、記入、回収を行った。

写真 18 （左奥）絵本よみ聞かせを聞く子ども達
（右手前）アンケート記入を行う保護者

保護者がアンケートを記入している間、子ども達に絵本の読み聞かせを行い、子ども達が静かに待つことができるように配慮した（**写真 18**）。調査項目は（1）参加者について、(2）募集方法について【①この公開講座をどこでお知りになりましたか、②このような講座で、参加費がひと家族どのくらいまでなら参加を考えますか】、(3)「調理実習」について【①自分たちで作ったものは美味しかったですか、②親子で楽しむことができましたか、③次回、調理実習で作ってみたいメニューはなんですか、④幼児の栄養についてのお話は分かりやすかったですか？】、(4) 絵本読み「はらぺこあおむし」について【①「はらぺこあおむし」の絵本をお子さんはすでに知っていましたか、②読むスピードはいかがでしたか】、(5)「伝承遊び」について【①遊び方の説明は分かりやすかったですか、②遊び方は難しかったですか、③親子でふれあいながら「伝承遊び」を楽しむことはできましたか】、(6）全体について【①今日一日楽しく過ごせましたか、②ご意見・ご感想をお聞かせください】の 6 項目 14 問とした。なお、(3)の③、(6)の②を記述式とした。集計方法は、エクセルを用いた単純集計である。参加の 36 家族中 35 家族にアンケートに回答していただき、回収率は 97.2%であった。

4・1　参加者について

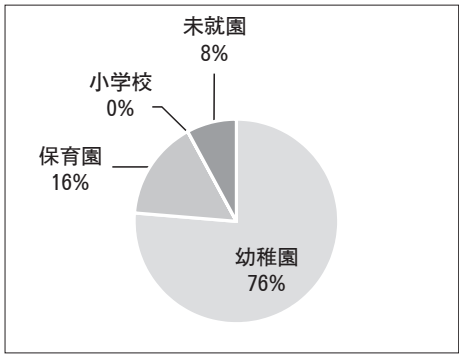

図 3　幼児の参加者の所属

幼稚園に通う子どもの合計が 70%以上を占め、次いで保育所が 16%であった（**図 3**）。

平成 27 年 4 月より「子ども・子育て支援新制度」が本格開始されたことに伴い、下関市内でも「認定こども園」が整備されつつあるため[6]、今後、就学前の幼児を対象とした企画に関するアンケートを実施する場合、回答の中に「認定こども園」という項目を増やす必要があると思われる。

4・2　広報（募集方法）と参加費について

募集情報の入手先については、著者らが作成した園への配布物、チラシが多く、次いで、園

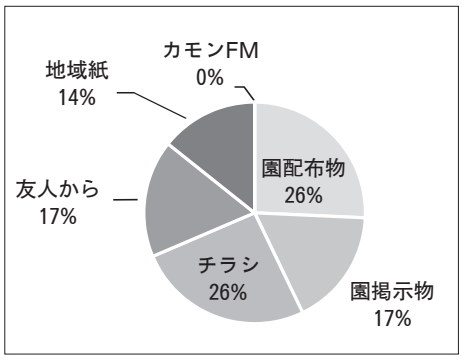

図４　講座の入手先は？

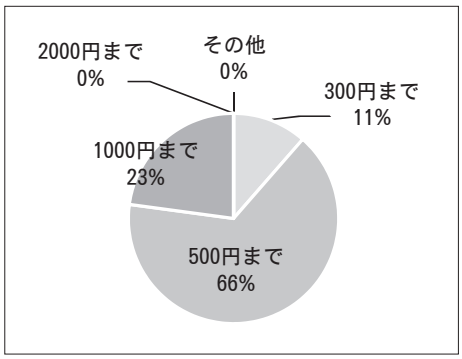

図５　講座に参加家族が出せる費用は？

での掲示物、友人からであった（**図４**）。「週刊リフレッシュ」などの地域紙を見ての応募者も14%を占めているため、参加者にとって地域紙も情報の入手に必須の情報媒体であることが窺える。

講座に出費可能な参加費は、一人あたり300円から500円までを合計すると77%を占めた（**図５**）。前年度[3]と同様にひと家族当たりの参加費は500円までが一般的に受け入れられる金額ということが分かった。

４・３　調理実習について（担当教員：塩田博子、芳賀絵美子）

「おいしかったですか？」では「おいしかった」が97%、「ふつう」が３%であった（**図６**）。「調理を楽しめましたか？」では、全員が「とても楽しかった」、「楽しかった」と回答した（**図７**）。

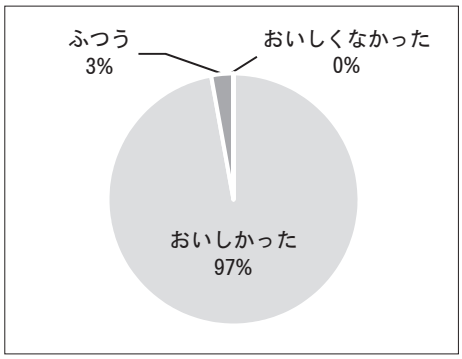

図６　おいしかったですか？

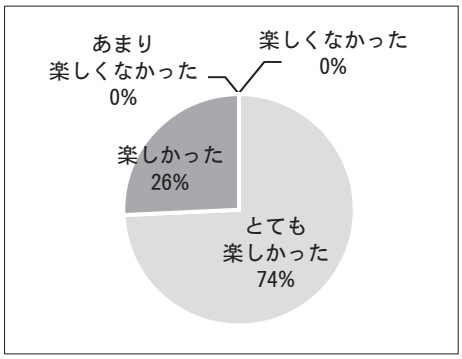

図７　調理を楽しめましたか？

また、「『幼児の栄養』についてのお話は分かりやすかったですか？」については「とても分かりやすかった」が60%、まあまあ分かったが40%であった。（**図８**）。

次回作りたいメニューで多かったのは、「菓子」「和食」「パスタ」「パン」「おにぎり」などが多く挙がった。前年度の回答で作りたいメニューにピザが挙げられていたことに基づき、今

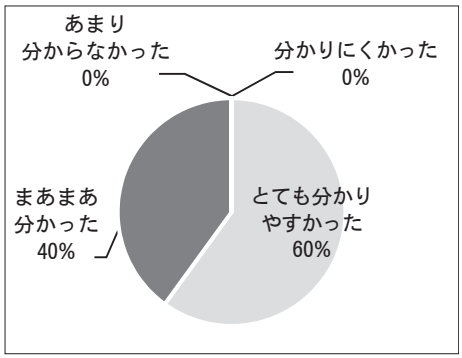

図８　幼児の栄養のお話は分かりやすかった？

年度はご飯とじゃがいものピザを作った（３・３・１）。前年度の保護者アンケート意見に基づいて立てた献立で、「おいしくなかった」家族が皆無であったことに注目したい。出来るだけ現状のニーズに応じた献立を考え、親子で調理をすることによって「家庭における「食育」の重要性を伝える」「子ども達に「遊び」（親子で調理をする）を通じて食の楽しさ・大切さを伝える」という活動目的が達成しやすくなると考えらえる。今後も保護者の多くの意見を勘案しながら、次回の開催方針を組み立てたい。

４・４　絵本読み「はらぺこあおむし」について（担当教員：高杉志緒）

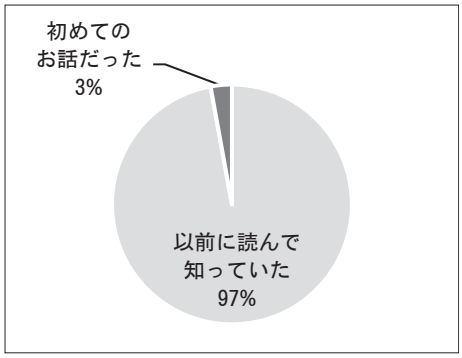

図９　「はらぺこあおむし」を知っていたか？

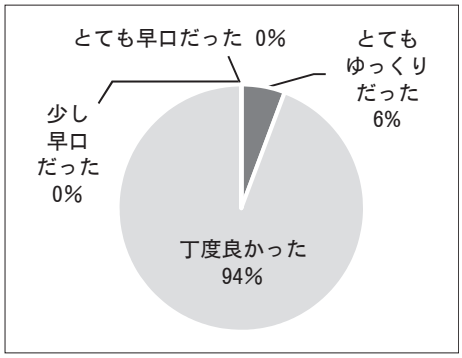

図 10　本を読むスピードはどうだったか？

「『はらぺこあおむし』の本を知っていましたか？」では「以前に読んで知っていた」が 97 %、「初めての本だった」が３％であった。「本を読むスピードはいかがでしたか？」では「とてもゆっくりだった」が６％、「ちょうどよかった」が 94％である。

絵本の読み聞かせに関連した２つの質問の目的と分析は次の通りである。１つ目の「『はらぺこあおむし』を知っていますか」という設問の意図は、認知度の違いが当日の反応・理解度の一要因になると考えたからである。「はらぺこあおむし」は、英語初版 1969 年、1976 年邦訳出版以降、読まれ続けているため認知度は高いことが予想できたが、「初めての内容だった」と答えたのは僅か３％（１名）であり、殆どの参加者が既に読んでいたことが分かった（**図 9**）。また、２つ目の質問である本を読む速度については大勢（各回約 50 名）の前での読み聞かせの速度に対して学生が体得し、改善を図るために質問させて頂いた。「ちょうどよかった」（94％）が大半を占め、「とても早口だった」と回答した参加者はいなかった（**図 10**）。従って、１つ目の設問の認知度と勘案すると当日の読み聞かせに関しては、参加者が絵本の内容を十分

理解できたことが窺える。

４・５　「伝承遊び」について（担当教員：稲員祥子）

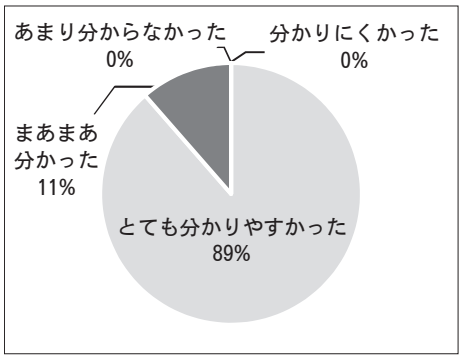

図 11　「伝承遊び」の説明は分わかりましたか？

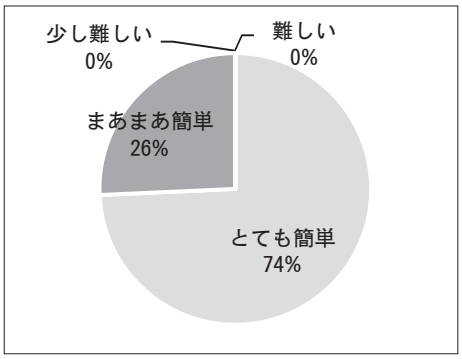

図 12　遊び方は難しかったですか？

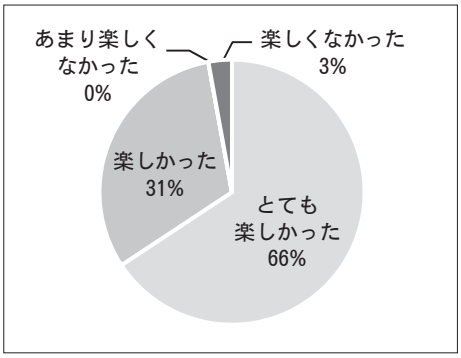

図 13　「伝承遊び」は楽しめましたか？

「『伝承遊び』の説明は分かりましたか？」では、「とても分かりやすかった」と「まあまあ分かった」を合わせると 100％となった（**図 11**）。「遊び方は難しかったかですか？」についても「とても簡単」と「まあまあ簡単」を合わせると 100％となった（**図 12**）。全員が「簡単」と感じられた比較的単純な遊びを行ったことと学生の実演を交えながら遊びを一つずつ説明したことが理解度を深め「わかりにくかった」参加者がいなかったと考えられる。

また、「『伝承遊び』は楽しめましたか？」では「とても楽しかった」66％、「楽しかった」31％、「楽しくなかった」３％と回答した。（**図 13**）。「楽しくなかった」と回答した１家族（１日目）の要因については、事前の期待と実施内容が食い違っていた、親子での触れ合いを十分に楽しむことができなかった、などの理由が考えられる。その一方で、アンケートの自由記述の中に「子どもは伝承遊びの機会が少なく、難しいようでしたが、このような機会は助かります」「伝承遊びは自分が子どもの頃遊んでいたが、しばらく遊んでいないので忘れていた。久しぶりに思い出し、子どもに昔の遊びが教えられて良かった」という御意見も頂き、伝承遊びを通じて日頃は意識しない世代間交流を楽しんで頂いたことが分かった。総合的にみると「楽しかった」が 97％を占めるため、開催目的の１つである「親子がふれ合う時間と伝承遊びの良さを味わう機会を提供する」という事項を概ね達成できたのではないかと考えられる。

４・６　全体について

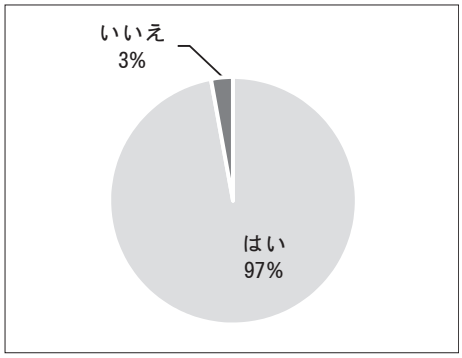

図14　今日１日、楽しく過ごせましたか？

「今日一日楽しく過ごせましたか？」では、「はい」が97%、「いいえ」が３%と答えた（**図14**）。意見・感想欄には、「上の二人となかなか遊ぶ時間がなかったのですが、今日はゆっくり２人と楽しむことが出来ました。」「また参加したい」「年に何回か開催してほしい」「普段は一緒に料理をする機会がないのでよかった」「家でもやってみようと思います」「子どもは伝承遊びの機会が少なく、難しいようでしたが、こう(ママ)ゆう機会は助かります」「託児をしてもらっていたので、とても楽しく参加できた」「今回は、受付、午後からの部が１つの建物内での移動だったので楽だった。」等の好意的な意見が多数寄せられた。反面、「メニューの品数を減らしてでも、もう少しゆっくり作りたかった」「『はないちもんめ』をしたかった」などの意見も頂いた。

５　おわりに　―今回の反省と今後について―

前章のアンケート結果や各回終了後に開催したボランティア学生を交えた反省会をふまえて、各実施項目最初に実施項目毎に反省・考察を記し（**５・１～５・６**）、最後に全体的な考察として総括を行い今後について述べる（**５・７**）。

５・１　参加者および広報について

参加者をみると、図３より参加幼児の76%を幼稚園が占めており、保育所の16%と大きな差が見られた。これは、前回の幼稚園70%、保育所17%[3]とほぼ同じ結果で、やはり保護者の就労状況が参加に大きく影響していることが推察される。また、今年度より「子ども・子育て支援新制度」が始まったので次回のアンケートには「認定こども園」を選択肢に入れる必要がある。

広報に関していえば、図４より参加者の情報入手先について前回と比較して述べる。前回、群を抜いて多かったのは地域紙である「サンデー下関」（64名中21名）からの入手経路であった。しかし、今回は掲載されなかったため園の掲示物・配布物が合わせて43%と大半を占めた（前回64名中15名）。従って、次回より今回参加確認ができた施設には配布チラシの数を増やす必要があると考える。また、園からのお知らせに次いで多かったチラシ（26%、前回64名中４名）・友人から（17%、前回64名中８名）・「週刊リフレッシュ」（14%、前回64名

中10名）といった広報の効果も無視できない割合である。

以上より今後、チラシ配布数の増量を実施すること、前回大きな広告効果を出した「サンデー下関」には有償での広告掲載も視野に入れることを念頭に募集を行いたい。

５・２　受付について（担当教員：高杉志緒）

前回のアンケート自由記述回答に「駐車場から受付までの順路が分かりにくい」とあったことに基づき、今回は駐車場で案内担当者が待機して受付まで誘導した。また、午前と午後の活動場所が隣接していたこと、託児は外注したこと、以上によって受付を一か所で行うことができた。今回のアンケート自由回答に前回も参加して頂いた方が記入したと思われる「今回は、受付、午後からの部が１つの建物内での移動だったので楽だった」という記述があり、参加者も安心して受付・移動を行えたことが窺える。

また、受付場所を調理実習室横にしたため、手続き終了後、すぐに参加者は土足から上履きに履き替える必要があった。従って、履き替え時に腰掛けたり荷物を置いたりする場所を予め設けておく必要があったが、初日は設置していなかった。しかし、２日目に下足置き場横にベンチとマット（敷物）を置くことによって靴を履き替えやすくなった。

５・３　託児（業者連絡担当教員：塩田博子）

今年度は、すべての会場を同一棟内同一階で行ったことにより、保護者の方にも身近なところに子どもがいる、また、専門業者による託児であることから、アンケートの自由記載からもわかるとおり安心して調理を行うことができたと思われる。

筆者らも託児を外注したことにより、余裕をもって担当活動を行うことができた。しかし、「子どもゆめ基金」助成金額の都合上、一日中の託児であったものが、午前中のみの委託となり、託児を希望された参加者の皆様には、午前中に寝ている子どもをそのまま保護者に引き渡す、午後の伝承遊びを対象児童と楽しむことが難しいなどご迷惑をかけてしまった。しかし、午後の伝承遊びは動作が比較的少なかったため、未満児を交えても楽しむことができたのではないかと思われる。しかし動きのある遊びでは託児は必須であるため、来年度の活動については、託児時間や参加者の募集についても検討する必要がある。

５・４　調理　―親子クッキング―（担当教員：塩田博子、芳賀絵美子）

アンケートからも分かるように、全体を通してみると「おいしい」「楽しい」親子クッキングを行うことができた。（**図６**、**図７**）。

但し、企画者が計画した献立内容が盛り沢山で作業内容が多かったため、当日のクッキングの作業に余裕が持てなかったことが反省点であり、具体的には次の４点が挙げられる。

１点目は、献立立案の際の留意点についてである。アンケートの記述部分で「もう少し料理の説明がほしかった」「料理時間が子どもには長かった」「もう少しゆっくり作りたかった」などの意見が挙がった。また「片付けも含めて食育なので、片付けも少しさせたかった。」との意見を頂いた。冒頭に述べたように今回はメニュー数を増やしたことで、参加者に悪影響を与えてしまった。開催目的の達成「子ども達に「 遊び 」を通じて食の楽しさ・大切さを伝える」を念頭に入れた場合、メニューの簡素化を行い、後片付けまでを参加者に行って頂く方がよいと考えられる。

２点目は、班構成および年齢別作業分担についてである。先に述べた反省点を改善するためには、班構成および年齢別作業分担の工夫をする必要がある。これまでは、なるべく同年齢の子どもを同じ班にするように配置していたが、年少・年中・年長をまんべんなく配置することで、無理のない範囲で楽しく調理が行えると期待される。また、レシピには各年齢にあった作業にマークを表示してわかりやすくするような工夫も行いたいと思う。

３点目は、料理を始めるにあたっての説明不足である。今回は、前回よりメニュー数が増えたこともあり、限られた時間で幼児にも理解できるような説明を行うのは非常に困難であった。実演はもとより、視覚にうったえるような媒体の作成が必要であると考える。ただ、毎年献立は変わるので、その都度媒体を作成しなければならないのが難点である。これらのことから、比較的手間のかからない効果的な媒体を用い、ポイントを絞った説明を行う必要性がある。

４点目に、スタッフ食作成のために多くの人手を使いすぎているという点である。前報でも考察したように(注３)、参加者ではなくスタッフに人手や手間をかけるのは本末転倒である。従って次回からは見直し、給食実務実習室での作業は省くことによってマンパワーを有効に活用したい。

５・５　調理参加学生と大型絵本読み聞かせ「はらぺこあおむし」（担当教員：高杉志緒）

食育表現ゼミ所属学生（３名）は「親子クッキング」に参加後、当日の反省会とは別に授業時に反省会を行った。その結果、出た意見は次の通りである。

【学んだ点】

・予め、当日の献立に基づいて試作・試食していたが、材料・調理方法・手順の流れを事前にもう一度、自分自身が確認しておく必要性を感じた。
・（当日参加した食育表現ゼミの学生は）３名とも社会人で、一定の調理経験を持っているが、殆ど調理経験がない保育学科学生は当日、親子で調理する作業に入るのは困難ではないだろうか。
・初日は、調理時間が予定より長くなったので、午後の活動で子ども達が落ち着かず動き回る

姿もみられたが、２日目は作業が軽減され、スタッフも経験を積んだため時間内に作業でき、午後の活動にもゆとりが見られた。１日の活動を全体的に捉える必要があることが学べた。

・班の活動を通じて、兄弟姉妹間の（道具を使う順番等の）取り合い・ゆずり合い・思いやりの様子が観察でき、参考になった。
・担当班の子どもが野菜の切砕に飽きたので室内で出来るお絵かきや絵本読みに誘ったが「独りじゃ嫌」と言われて困った。母親がなだめて作業を進めたが、現場での対応を考える機会となった。
・作業を進める上で、保護者にどのタイミングでどのような言葉を掛ければ良いのか、実践的を通じて考えさせられた。
・絵本読みの経験が殆どなかったので、練習と本番を体験でき、良い機会になった。
・日頃は殆ど接する機会がない栄養健康学科の教員・学生と交流を持つことができた。

【今後の希望】

・輪切り等子どもにとって細かい作業が多かったので、もっと単純で手軽な献立でも良いのでは？
・可能ならば栄養健康学科学生・保育学科学生各１名ずつ各班に入って活動した方が良いと思う。
・初対面の親子と調理・遊び、双方を通じて楽しむことができる機会は貴重なので、今後も活動を継続し、より沢山の学生に参加して欲しい。

以上、学生の主な意見をまとめると、本活動を通じて①保育現場に生きる実践体験（行事前の事前準備、絵本読み、親子の観察、声掛けなど）、②学内・地域の人的交流の推進、大きく２つの観点から実践的な学習体験・成果を得たことが分かった。今回はゼミナールの単独活動として「絵本の読み聞かせ」を行ったが、今後も講座全体の主題・流れ・時間配分等を考慮に入れた食育表現方法・媒体を適宜、活用したい。

５・６「伝承遊び」について（担当教員：稲員祥子、報告者：高杉志緒）

第１回・第２回は親子で制作を行った後、工作物で遊ぶという流れであったが、今回は「伝承遊び」特に「わらべ歌」あそびを行うことによって、親子のふれ合いを主体として楽しく活動することができた（４・５）。

また、全体的な反省点についていえば、１つ目は、事前の準備が十分に行き届いていなかったことである。学生スタッフを中心とした会場飾りつけの準備・遊びを説明する練習など、公開講座開催初日の午前中まで確認・練習を行う結果となってしまった。

２つ目は、全体の流れを十分に考えて予め試行しておくことである。会食後、調理実習室か

ら午後の活動を行う学生ホールに移動して参加者全員が揃うまでに時間が必要であった。初日は、≪導入の前の時間調整≫①手遊び（「げんこつやまのたぬきさん」）、②参加者全員集合、≪導入≫③「わらべ歌遊びの説明」、④班別に分かれて座るために移動、≪主活動≫⑤班別での遊び、という流れであったため、「④班別に分かれて座るための移動」に時間がかかった。そのため、２日目は≪導入の前の時間調整≫の折に、最初から班別に分かれて座ってもらうことによって、時間の短縮を図った。また、時間調整のため当初予定していた「はないちもんめ」を行わなかったことに対して、初日のアンケートの自由記述で「（子どもが会場の掲示物に書いてあった）『はないちもんめ』をしたかったようなのですが、なくて残念でした」という御意見があった。そこで２日目は、予め事前に省略することを伝えて遊びを始めた。全体的な流れを早めに確認し、スタッフ内で事前に試行してみることによって、対応を考えて掲示物を整えるべきであった。

３つ目は、子ども（親子）の活動の動き、特に活動に馴染めない子どもの動きを十分に考慮しておく必要がある点である。実際に、初日、午後の開始当初は子どもが母親となかなか遊び始めず、歩き回ったり隣に座った家族の子どもに話しかけようとしたりする子どもの姿があった。戸惑う母親に対して、教員が「慌てなくて大丈夫ですよ。ゆっくりいきましょう」と声を掛けたところ、母親が落ち着いて見守る内に、子どもも落ち着き、母親と一緒に遊び始める姿がみられた。従って、家庭・子どもの状況によってはすぐに遊びに興じられない場合もあることを予め想定して、事前に援助・言葉かけなどを考えておく必要があることが分かった。

４つ目は、「伝承遊び」の補助を行ったボランティア学生の参加の仕方についてである。ボランティア学生７名は、午後の「遊び」のみに参加し、午前中の親子クッキングの様子については見学・補助を行わなかった。従って、参加者に伝えることを目標としている「食」と「遊び」の楽しさを伝えるという双方の目的について、「伝承遊び」ボランティア学生は、体感しにくかったことが挙げられる。今後、親子クッキングに対して、見学・事前の説明会等、関わることで参加者自身が両方の楽しさ、大切さを体感できるように検討したい。

このような反省点はあるものの、当初に定めた「親子がふれ合う時間と伝承遊びの良さを味わう機会を提供する」という目的は概ね達成できたと考える。アンケートの「伝承遊びは楽しむことができたか」という質問項目に対する満足度の高さからも参加者の充実感が窺うことができたと考えられよう（**図 14**）。

５・７　総括および今後について

アンケート結果の集計後、企画した教員で今回の講座の総括および今後についての話し合いを行った。総括と今後の開催に対する展望は以下の通りである。

１）講座の開催日程（回数）について

前回は、３日（同内容で対象者が異なる３回）開催したが、今回は２日（同内容で対象者が異なる２回）続けて行った。前回と同様、初日終了後に参加スタッフで反省会を行うことによって、翌日の開催に直接生かし、すぐに改善に繋げることができた（例：「親子クッキング」直ぐに作業に取り掛かることができるようご飯とイモは炊いておく、ヨーグルトとバナナは混ぜておく、「伝承遊び」最初から班別に集合してもらう）。また、今回は、当初から２日間（２回）の開催を予定していたため、前回のような急な開催日の増加がなく、当初の予定日程通りに講座を進めることができた。その他、開催目的にそった反省は次の通りである。

２）「地域住民に対し、家庭における「食育」の重要性を伝える」

上記の目的を設定した背景には昨今の社会的状況、すなわち①少子化・核家族化、②保護者の労働時間・共働き家庭の増加などの生活面の変化、③偏食やコショク（孤食・小食・子食・個食・粉食）などの食生活面の問題の顕著化、以上に基づいている。また、今回のアンケートの自由記述にあるように「親子でゆっくり料理をする時間がなかなか作れない」「包丁を初めて持たせることができた」など、日頃、家庭内で親子がふれあいながら調理を行っていない現状がみえるため、参加者に対して本目的は概ね達成できたと考えられる。

今回の目的の達成について、より巨視的にみると本活動と家庭との連携活動の必要性が挙げられる。つまり、本活動への参加が「こどもと一緒に作った」という親子のふれあいをはじめ、「今まで苦手な野菜が食べられるようになった」「たのしかった」等、調理活動・食への興味や関心の向上・偏食の改善などのきっかけとなったと考えられる。僅か１日の活動ではあるが、本活動が食育推進の一助となるよう継続していきたい。

３）「子ども達に「 遊び 」を通じて食の楽しさ・大切さを伝える」

子どもは遊びの中では、ルールを守り、楽しく遊ぶことで多くの社会性を築いていく。今回の活動においても「親子で一緒に食事を作る」「友達と一緒に食事を作る」「親子、友達と同じものを楽しく食べる」「一緒に同じ遊びを行う」という集団活動、コミュニケーションを通じて子ども達は社会性を学ぶことができる。同時に今回のアンケート回答に「片づけも含めて食育なので片づけも少しさせたかった」という御意見を頂いた。これは活動全体（遊び）についてもあてはまることとして重視したい。今後、片付け、配膳、マナー向上を視野に活動を展開したい。

また、子どもの生活の中心は「遊び」である。前項の目的の達成手段（家庭との連携の必要性）と重なるが、いわゆる「遊び」は「食育」と密接に関係していることを各家庭に周知して頂くことが重要であろう。栄養バランスへの配慮だけでなく、子どもは遊びを通じて「おなか

のすくリズム」ができ「食事をおいしくいただくこと」ができるため、食生活の基礎作りは家庭であるといえる。幼児に対して繰り返し遊びの中に「食育」を取り入れて実践することが、食生活の改善に結びついていくと考えられる。従って、今後も地域貢献事業として、継続した食育推進活動を行うことにより、食の大切さを子どもたちへ浸透させていくことが必要と考えている。

４）「親子がふれ合う時間と伝承遊びの良さを味わう機会を提供する」

アンケート結果の満足度等から、目的は概ね達成できたと考える（５・６）。参加者と数時間しか一緒に過ごさなかったのに、学生スタッフと別れる時、子ども達が寂しそうな表情をしていたことから、親子・家族間とのふれ合いを提供しただけでなく、学生スタッフと地域住民との貴重な交流の場となったことが実感できた。親子間のふれあいを間近にみることのできる機会は、将来保育者を目指す学生にとっても貴重な体験である。今後も実践的な教育・ボランティアを念頭に地域貢献を進めたい。

注　参考文献・論文

(1) 下関市編集発行：「下関ぶちうま食育プラン」，pp.46，2008
下関市編集発行：「第２次下関ぶちうま食育プラン」，pp.50，2014
(2) 独立行政法人国立青少年教育振興機構：「子どもゆめ基金平成27年度募集案内」，pp.121，2014
(3) 塩田博子・稲員祥子・高杉志緒・芳賀絵美子：第２回「おいしいね　たのしいね」公開講座開催報告，下関短期大学紀要，33，pp.53‐71，2015
(4) 塩田博子・芳賀絵美子；幼児期（３～５歳児）の食育推進活動における媒体の作成と実践，下関短期大学紀要，31，pp.33‐46，2013
(5) 久津摩英子：「心と心がつながる　わらべうたあそびのレシピ」，日本幼年教育研究会，pp.104，2003
細田淳子：「子どもに伝えたいわらべうた　手合わせ遊び　子守り歌」，鈴木出版株式会社，pp.119，2009
(6) 下関市こども未来部こども育成課：「For　Kids　プラン2015」，pp.177，2015